神奈川・鶴岡八幡宮境内
研修道場用地遺跡

1　所在地　神奈川県鎌倉市雪ノ下
2　調査期間　一九八一年（昭56）八月～一九八二年九月
3　発掘機関　鶴岡八幡宮境内発掘調査団（団長・大三輪龍彦）
4　発掘担当者　斉木秀雄
5　遺跡の種類　寺院跡
6　遺跡の年代　一二世紀末～一六世紀
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

鶴岡八幡宮は康平六年（一〇六三）、源頼義が鎌倉由比郷に、前九年の役の戦勝を記念し勧請した石清水八幡宮が前身であり、治承四年（一一八〇）鎌倉に入った源頼朝が現在地、小林郷北山に遷した。

もとは神仏習合により、鶴岡八幡宮寺と称し別当職等も置かれていたが、明治

（横須賀）

元年（一八六八）の神仏分離令を受け境内の大塔以下の諸堂と共に仏職も廃止された。

調査地点は鶴岡八幡宮境内の東側境界線（土塁）内側、馬場道北一帯に位置し、豊臣秀吉の指示により天正一九年（一五九一）に作成された謂ゆる「造営目論見絵図」では「やなぎ原」と記されている辺である。

調査では一二世紀末～一五世紀にかけて四期にわたり構築された版築地業面が確認され、それらの版築面から掘立柱建物、半地下式建物（方形竪穴建築跡）、井戸、溝、土壙、土塁等が検出され、多量の中国産陶磁器、瀬戸窯製品、常滑窯製品、かわらけ、仏殿あるいは仏像に伴う荘厳具を含む漆製品、人形、僧形八幡神坐像、将棋の駒等を含む木製品が出土している。木簡、墨書陶磁器、木片等が出土したのは検出された土塁に伴う内側（境内側）の溝のうち第Ⅱ期の溝、第Ⅲ期の溝である。それぞれの溝の年代は第Ⅱ期が一四世紀中葉～一五世紀中葉、第Ⅲ期が一三世紀中葉～一四世紀初頭と考えられる。墨書陶磁器類で判読できるものは「仏」「上」、漆器皿は「万」である。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「ヤマクチヨリ
タヒウ□タテノ」 (166)×(42)×1 081

(2) 「□□□□。（穿孔）（穿孔）
〔今カ〕」 154×(43)×1 081

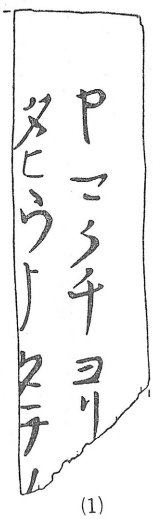
(3) ・「上下内外内宮」
・「□
□□
〔三カ〕」 192×(8)×1 081

この他に「梵字（キリーク）南無阿弥陀仏」と書かれた板碑伝（最大288×25×2）四点、墨書木片一六点、札状木製品一〇点が出土している。

9 関係文献

鎌倉市鶴岡八幡宮境内遺跡発掘調査団『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』（一九八三年）

（斉木秀雄）



(1)

(2)